

【中間報告書】

低炭素社会における「カワイイ移動体」とその有効性に関する研究

研究代表者 龍谷大学社会学部 工藤 保則
 共同研究者 武庫川女子大学生生活環境学部 藤本 憲一
 奈良女子大学文学部 寺岡 伸悟

1. 研究経過

本研究の予備的研究として、前年度（2011年度）後半から研究会組織を立ち上げ、ゲストを招いての研究会を2度開催した（（池坊短大・臼井喜法氏報告（クルマに関して）、東北大・五十嵐太郎氏報告（カワイイ建築・デザインに関して））。また、「ゼロカーボン社会研究会」においても、藤本・工藤が報告を行った。

今年度前半は、各人が個別研究テーマ（工藤：カワイイ移動体に関する現代社会論的研究（クルマを中心に）。寺岡：かわいい移動体に関する観光社会学的研究（鉄道を中心に）。藤本：カワイイ／かわいいに関する美学的研究）を中心に研究を進め、それを2か月に1度の割合で報告しあっている。年度後半は、前半の研究をより共有し発展させる形での共同研究としていく予定である。

2. 成果発表

前年度から今年度前期までにおいて、以下のような研究成果を発表している。

- ①『情報美学研究』第三号（武庫川女子大学生生活美学研究所・藤本憲一編集） 第二部『「移動体」社会学と『かわいい』情報美学の架橋（工藤、寺岡、藤本執筆）
- ②工藤保則、2011、「ゼロ・カーボン社会とカワイイEV」『龍谷大学社会学部紀要』38
- ③工藤保則、2011、「低炭素社会における『カワイイ移動体』とその有効性に関する研究」『龍谷大学社会学部紀要』39

3. 中間報告

カッコイイクルマからカワイイEVへ

工藤保則（龍谷大学）

1. これまでのクルマとEV

20世紀はガソリンエンジンを動力としたクルマの世紀であり、その100年がそのままクルマの進化の100年だったと言ってもいいだろう。そして、20世紀が終わりを迎えた時、同じようにクルマの世紀も終わりを迎えたように思われる。21世紀初頭の今は、クルマに関しての転換期なのかもしれない。

これまでは流線型のクルマが「カッコイイクルマ」であり、自動のクルマが「快適なクルマ」だった。流線型で自動に動くクルマが、私たちが求めてきたクルマだったのである。ところが、流線型で自動に動くクルマは人がそれほど関与しなくてもいいためか、自分がかかわることで楽しんできたクルマ好きの人たちの満足を得られなくなっていった。クルマは私たちの五感とのかかわりを減らしていったのである。これが今のクルマの姿である。そして転換期を経て、EVの時代になっていくのであろう。

EVの時代といっても今は入り口近くに立っただけであり、その先はまだはっきりしていない。逆に言うとそれは将来像を自由に描けるということでもあり、既存の自動車メーカーだけでなく、スモールハンドレッドと言われるメーカーや町工場も積極的にEVの製作をしている。EVは、ある意味、プラモデルのようなものであり、

電池とモーターがあれば動くため、町工場でも十分、製作できるのである。

町工場製のEVは、これまでのクルマのデザインとは異なるものになる可能性がある。かたちのとられから自由になって、デザイン的な楽しさからクルマが作られるかもしれない。そうすると、EVはおもちゃ的、ファストファッション的、家電的なものになっていくかもしれない。その時、変わるのはデザインだけでなく、意味もあり、それは「意味としての軽量化」と言っていだろう。これまでのクルマ好きの人たちが持っていたこだわりとは違う、軽く、浮遊感のあるものに、EVはなっていくように思われる。

2. カワイイEVによるコミュニケーション

実際に、スモールハンドレッドと言われるメーカーや町工場で作られる「意味としての軽量化」がなされたEVは、軽く浮遊感のある——別の言葉で言えば「カワイイ」——ものになっていることが多い。

「カワイイ」はかたちやデザインを指す言葉であると同時に、美意識（感覚）を作言葉である。少女たちが「カワイイ」という言葉を使うのは、なにか内実があることを言いたいわけではなく、「自分はこれが好き」という態度表明としてである。「好き」の代わりに「カワイイ」を使うので、実際に何がカワイイのかはそれほど問題ではない。

「カワイイ」についての議論には、真壁智治＋チームカワイイの『カワイイパラダイムデザイン研究』が助けになる。真壁は「カワイイ」をきわめて豊かな概念として捉えなおした。かたちやデザインの議論にとどまらず、生活者がこの「カワイイ」という概念を通して「自分」という「主体」を考えるというところまで掘り下げている。かたちやデザインが心の問題として把握され始めたことを示している。

カワイイEV、そして感覚共有型コミュニケーション装置としてのEVは、かたちやデザインの変化だけでなく、それと結びついた意識、規範、美学の変化も生むだろう。そのうちのひとつが「移動」に関するものかもしれない。カッコイイクルマによる移動とカワイイEVによる移動は、

本質的には異なるように思われる。また、クルマの意味のさらなる書きかえも行われるかもしれない。カワイイEVは、最近のクルマが持たなくなった「五感とのかかわり」「コミュニケーション」に関して、その質的变化、つまり、新しい「五感とのかかわり」「コミュニケーション」を生むかもしれない。それが生まれて定着していったとするならば、クルマにそれほど興味を持っていない人が、カワイイEVにこれまでとは違った興味の持ち方をするのではないだろうか。「速い」「カッコイイ」存在ではなく、「気持ちイイ」、「ヤサシクナレル」、「癒サレル」（真壁 2009：27）存在として、EVと人とのかかわりが生まれるかもしれない。

参考文献

真壁智治＋チームカワイイ、2009、『カワイイパラダイムデザイン研究』平凡社

電車が獲得した「かわいい」まなざし

寺岡伸悟（奈良女子大学）

1. 話題を呼ぶかわいい電車たち

新幹線に代表されるような「早くて正確」な電車イメージとまさに対照をなすかたちで、一部の鉄道マニアの範囲を大きく超えて共感を呼ぶ電車群がある。そうしたものをつなぐキーワードは「かわいい」である。いくつかの事例をあげておこう。

まず、和歌山電鐵株式会社の貴志川線を走る「いちご電車」、「たま電車」、「おもちゃ電車」である。JRから譲渡されたこの路線を住民に親しまれるものにするため、和歌山電鉄はかわいい塗装の電車を走らせ、大きな注目を集めるにいった。2006年8月から周辺の特産品いちごをモチーフにした「いちご電車」を運行開始、翌年には、おもちゃを展示し、車内でもおもちゃ部屋のような「おもちゃ電車（OMODEN）」が運行されている。2009年3月には貴志駅の駅長猫である「たま」をモチーフとした「たま電車」が導入された。地元の生活世界のなかに親しみをもって組み込まれた存在であり、電車自体だけでなく、鉄

道そのものがカワイイ存在となりえた例といえる。

また、岡山電気鉄道（岡山市）の市電 MOMO（2002～）は、その車内が特徴的なデザインで溢れている。曲線を帯びた車体で、内装は、ウッディな印象をあたえる。車内にはラッキーベンチと呼ばれる幅15 cm ほどしか座る部分のないベンチもあり、これではお尻が半分しか乗らず、「譲りあい」という、乗客のコミュニケーションを誘発するようにデザインされている。他にも、電車の中に丸型円筒形のポストがあり、1日1回、朝9時半に回収される。電車の中で手紙を出すというコミュニケーション行為が誘発される。

外見もかわいい MOMO であるが、外見だけではなく、内での人とのふれあい、コミュニケーションがキーコンセプトになっている。トランスポートーションの中に、シンボリックなポストや譲り合い座席など、コミュニケーションツールの内蔵が図られている。

また、上記以外にも、チョロQのように電車をおもちゃやキャラクター化したものの増加など、電車・鉄道は、機能とは別の次元で、親しみのもてる・カワイイ存在として登場しているのである。

2. 電車の「かわいさ」を作り出す諸要素

ここまで紹介してきた最近の電車・鉄道という存在が醸し出すかわいさについて、以下のような3つの要素を指摘しておきたい。

・デザイン

ローカル線や LRV において人気になる鉄道車両は、現在の通勤車両や新幹線の「スマートさ」とは対照的で、少し丸みをおび、サイズも小さい。また動きだすのも、遅くておっとりしており、さらにローカルなレトロ車両はゴトゴトと揺れ、LRV はもこもこ曲がる。まさにカワイイものの典型といえるような形状や動きをしている。

・キャラクター性

かわいいとして注目を浴びる電車は、生き物や手書き感などを有しているもののおおいのも特徴である。つまりキャラクター性や「人の感覚」がある。こうしたキャラクター性は人間との接点を

積極的に作り出している。

・公共を利用した「つながり」

近年の電車をめぐる「かわいさ」には、人と人のつながりを誘発する、つながりを可視化する、という仕掛けがたくさん用意されている。多数の人が利用する公共交通機関という、ある意味匿名的で個人的愛着とはほど遠くなりかねない存在を、上述のようなさまざまな仕掛けとその可視化によって、人々の親密圏やコミュニティの情緒的コンテキストのなかに、うまく納まることに、こうした電車は成功している。コミュニケーション誘発装置であるからこそ湧く親しみ、それがかわいさを支える1つの要素となっているようだ。

3. おわりに

ダニエル・ブーアスティンは、かつてコミュニケーションと移動は一体化していた、と指摘した（ブーアスティン『過剰化社会』）。テクノロジーの発展が二者を分離したと述べる。それは同時に移動体に機能のみを求め、コミュニケーションの地平から疎外していった。そうした地平からみれば、近年の、かわいい鉄道群は、再び移動とコミュニケーションを融合させることに成功しているといえよう。ここに、多くの人々が「かわいさ」を感じているのである。

移動体における「かわいさ」とは何か。近年の電車ブームを読み解くことで、デザイン面からだけでは見えない、こうしたマクロな意義とその変化が浮き彫りになるように思われる。

参考文献

- 飯田栄彦 2004 『甘鉄物語』 甘木鉄道株式会社
- 奥村美幸 2008 『九州レール・レディ』 メディアファクトリー
- 向後巧作 2008 『がんばれ！ 銚子電鉄—ローカル鉄道とまちづくり』 日経 BP 社
- 澤みゆき 2009 『モノレールガールズ』 メディアファクトリー
- 辻泉 2009 『なぜ鉄道は「男のロマン」になったのか—「少年の理想主義」の行方』 宮台真司・辻泉・岡井崇之編著『「男らしさ」の快楽—ポピュラー文化からみたその実態—』 勁草書房 pp. 219-246.
- ブーアスティン, D. 1980 『過剰化社会—豊かさへの不満』 東京創元社
- 水戸岡鋭治 2007 『旅するデザイナー—鉄道でめぐる九

州一』小学館

宮田親平 1998 『ヨーロッパ市電王国に行く』光人社

21世紀の美学原理としての「かわいい」

×「モバイル」をさぐる

藤本憲一（武庫川女子大学）

1. 20世紀の美学原理としての「流線形」「白い箱」「機甲」

年度前半では、21世紀の新しい美学原理としての可能性をもつ「かわいい」について、研究の歴史の整理、古今の文献調査・渉猟、さらに研究の中核をなす基本概念の検討をおこなった。

先行する前世紀において、「かわいい」のデザイン上の仮想敵と考えたのは、20世紀を席卷した、流線形のパラダイムである。流線形がそんなに速度に優れていると言われるれば、実はそんなに早くはない。流体力学の神話に基づく、古風なデザイン・パラダイムに過ぎない。いまだに流線形らしいデザインで、お尻にフィンをつけている乗用車があるが、あれはF1のようなレーシングカーのデザインから来ている。F1カーにフィンが必要なのは、時速300キロも出すと車体が浮いてしまうから、飛ばないようにフィンで抑えているのである。町中を走る乗用車がいくら路面を飛ばしても空を飛ぶわけがないのが、カッコいい、スピード感がある、というイメージでお尻にフィンをつけている。20世紀の流線形神話のまぬけで時代遅れな名残りであり、ヒトの退化した尾てい骨のような余剰物でしかない。

自動車でなく、建築デザインにも、強固な20世紀神話がある。コルビュジェやミース・ファン・デル・ローエの「白い箱」が、それにあたる。とにかく建物は機能的に角ばっていて、白くて色がない箱型が一番いいという美学だ。たとえば、パティオという地中海様式は、カタカナの「口」の字型の建物の中に、日の当たる中庭がある住宅様式である。こうしたパティオ型をはじめ、白くて四角い建築デザインの極北が、世界の大都市に林立する四角い高層ビルディング群である。

さらに、20世紀パラダイムとして一世風靡した

のが、「機甲」という概念である。これは、今日でいえばガンダムの「モビルスーツ」的なデザイン思想でもあるが、最盛期は1930年代から50年代であった。

2. 21世紀の美学原理としての「かわいい」×「モバイル」

さて、それにひきかえ21世紀は、「かわいい」がリードしているかに見える。

当方が、最初に着手したのは、『かわいいもの研究』（1994 武庫川女子大学家政学部被服学科）を、卒論で書いた西田千香さんとの共同研究であった。

そして、「かわいい」とならび、20世紀的な傾向を継続しているパラダイムが「モバイル」である。

モバイル（ケータイ）と、かわいいものの接点に位置する研究として、当方が西田千香さんの卒論と並んで、画期的な卒論として評価しているのは、柴崎泉さんの『かばんの中身』（2004 武庫川女子大学生活環境学部情報メディア学科）がある。これは女子大生の鞆の中身が、便利なモノという機能性ととともに、かわいらしさやフェティシズムやいろいろな要因で決まるのだ、という点を多角的に分析した。

さて「かわいい」×「モバイル」の最新流行形として、当方がデビュー作『ポケベル少女革命』（1997）で問うたテーマである。

20世紀の後半から現在に至るまで、当時はポケベル、現代はケータイを持つミニスカ女子高生の姿、これは普遍的な「かわいい」×「モバイル」のアイコンであり、同時に「流線形」×「機甲」の21世紀的に変奏されたアイコンでもある。100年後の歴史研究者がAKB48らのアイドルの姿を見て、「なぜこの時代には、二十歳を超えたオトナの女性が疑似的なブレザー制服を着て、女子高校生の偽装をしたのか」「アイコンとしての女子高生は、なぜ年齢性別を超えて文化的覇権を制したのか」という問いを立てるのではないかと、当方は確信している。

記号論哲学では、「透明な対象指示語」が、言葉の意味の最初の始まりではないかといわれている。それに対して鏡のような存在として、「不透

明な自己言及語」というものがあることは、対立概念として知られていた。それについてはいろいろ言われているが、たとえば「嘘つきのパラドックス」や、「自己言及のパラドックス」の問題がある。「かわいい」という語は、まさにそれにあてはまる。「かわいい」という語は何も指し示していない。ガラスになってパツと向こうが見えても、「それって、かわいいの？」となる。先ほどの自分を表わすというのは、記号論的にこういうふうに表示される。自己言及する、自分のことを指し示す。たとえば「エヴィアンのミネラルウォーターの小さいボトルはかわいいよね」「いやいや、大きい方がいいよ」「十六茶の方がかわいいよ」といろんな意見が出る。このバラバラな方向性の噛み合わなさはどうでもいい。つまり、エヴィアンの小さいボトルではなく、十六茶の新垣結衣の変なダンスがかわいいと言っているのかもしれない。とにかく、こんな私が「かわいい」。こんな変な対象まで「かわいい」と言ってしまうすごい内面や感性をもった私は当然「かわいい」という複雑な「かわいい」である。

ただ単純に考えると、ここでは無限のエスカレーション、インフレーションが続いていく。これまで単純にカワイイと言われなかった対象をいかに「かわいい」と呼ぶかの競争が、無限に続いていくのである。だから大人から見たら意味不明語に見えるが、女の子たちは解放されたように無限にそれを使い、増殖していく「自己言及性」である。真壁氏がいつている「カワイイ」と私がいつている自己言及性はかなり近いのだろうと考えている。ただこれくらいでいいに説明しても論理的に伝わりにくいところを、直感的にビジュアルに伝えていく建築家のやり方もリスペクトした上で、今後の「かわいい」×「モバイル」研究を進めていきたい。

ある意味で、それは「21世紀の新しい情報美学」を模索する作業にも、結びつくのではないかと考えている。

参考文献

- 藤本憲一「モバイル“mobile”の文化社会学——“移動体”300年史における“家→動→体”のメディア変容」『ファッション環境』vol. 7-4 ファッション環境学会 1998
- 藤本憲一「反ユビキタスの“テリトリー・マシ”——“ポケベル少女革命”から“ケータイ美学”にいたる“第三期パラダイム”」『ケータイのある風景』（松田美佐他編）北大路書房 2006
- 藤本憲一「携帯・iモード」『世界』no. 677 岩波書店 2000
- 藤本憲一「“ポケットベル”に関するメディア・フォークロア的試論」『ファッション環境』vol. 5-4 ファッション環境学会 1996
- URRY, John, “MOBILITIES” Polity Press 2007
- 藤本憲一『ポケベル少女革命——メディア・フォークロア序説』エトレ 1997
- 藤本憲一+佐藤可士和「ポケベル——日本人のつながりを変えた携帯端末」（佐藤可士和氏と）『らいじんぐ産〜追跡！につぼん産業史』（NHK BSプレミアム 2011年4月14日放送）
- 藤本憲一「SWATCHISSIMO（スウォッチ革命）——腕時計のファッション化をめぐる諸相」『ファッション環境』vol. 3-3 ファッション環境学会 1993
- 藤本憲一「スマートモブズ・ポケベル少女・ながらモビリズム」『社会学事典』（日本社会学会編）丸善 2010
- FUJIMOTO, Kenichi ‘Nagara-Mobilism in the Clutches of Cutie Mobs’, “Welt in der Hand”, (YOSHIDA, M. et alt. eds.) Spector Books 2010
- HJORTH, Larissa “Mobile Media in the Asia-Pacific: Gender and the Art of Being Mobile” Routledge 2008
- 真壁智治『カワイイパラダイムデザイン研究』平凡社 2009
- 藤本憲一「寝室に渦巻く、“かわいい”ケータイ空間——『ルーバラ』における平成版“着所寝”」『ねむり衣の文化誌』（睡眠文化研究所+吉田集而編）冬青社 2003